

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

いかなる病気であろうと人は人— ハンセン病資料館の存立意義

国立ハンセン病資料館
館長 成田 稔

あけまして

おめでとう

ございます

当館には平沢保治（前多磨全生園患者自治会長）という語り部がいて、主に小学生を対象に人権教育を精力的に行っています。それを聞いている児童たちが、「らい予防法違憲国賠訴訟」の「熊本地裁判決」において、その違憲性の根拠にあげられた「日本国憲法」第13条の「個人の尊重」を知っているとは思いませんが、語り部に届く感想文からしますと、終生隔離の非道性はよく理解しているように思われます。

実は、一昨年に『多磨』誌に寄稿する日本の癩（らい）対策に関連した小論を書きはじめたとき、ふとあることに気づいてひどく慌てました。それは、この小学生たちにもわかるようなことが、なぜ90年近くも続いたのだろうか？という疑問です。

私ごとですが、医者としての人生の大部分をらい療養所で過ごし、続いて20年近くをハンセン病資料館にかかわってきました。語り部の話を聞いた小学生の思いからす

れば悪の加担者に違いなく、よい医者と思うほど自惚れてもいませんが、そのような自省がさらさら無かったのも確かです。

こうした自身が理解できないまま、何か示唆を得られる記事はないかと図書室の書棚を漁って



花さき保育園の庭で遊ぶ子供たち

いて、はつと目にとまったものがありました。それは『愛生』誌の一九三五年五月号の表紙を飾った「癩予防デー」のポスターで、そこには「癩を根絶せよ」と大書されていたのです。

癩は不治といわれた時代に「癩の根絶」とは意味が通りません。しかしこれを見た一般大衆が何の疑問も湧かなかつたとすると、この「癩の根絶」はすなわち「癩患者の根絶」と読んだのでしょうか。

しかし癩は病気、患者は人であつて、「人の根絶」など、間違つてもいえることではありません。

私の書架にあつた杉村春三の『癩と社会福祉』の付箋を貼ったページを繰ってみると、「病人と病気の峻別が第一」、「病人は人格体」とありました。しかも私自身がそこに鉛筆で傍線を引き、丁寧に丸で囲んでいました。そればかりではありません。私はずっと以前から、第七回国際らい学会議（一九五八年、東京）において、メキシコが新設した「らい予防法内規」の目的（われわれは患者と戦うのではなく、

らいそのものと戦う）も知っていたのです。

「人は人」という鉄則を疎かにした自らの愚鈍ぶりを敢えて棚に上げれば、日本の癩（らい）対策の根本的過誤はまさしくここにあり、それは現在にも続く、精神病、認知症、身体障害などさまざまな病気、病態への対策にも当てはまるでしょう。人並みでない、ともいうような差別的心情をあらわにして。

国立ハンセン病資料館はどうして大切なのか、なぜ永久に残さなくてはならないのか。自らの愚かしさを知つてようやくこの「どうして？」「なぜ？」に答えられるようになった気がします。それでも敢えて書かせていただいたのは、らい対策の非が広く強く世に謳われる折、非を犯したゆえんを覚つたからには悔悟の情を、包まず打ち明けて当然と考えたからです。

今年、「国立ハンセン病資料館」の前身「高松宮記念ハンセン病資料館」の創立20周年を迎えます。今もなお、関係資料の収集、展示の充実、社会啓発の促進など課題が山積しておりますが、何とぞ皆様のご協力、ご理解を賜りたく、自らの不徳を詫びながら改めてお願い申し上げます。



笹川記念保健協力財団主催で ワークショップと国際シンポジウム開催

10月24日(水)・25日(木)の2日間の日程で、笹川記念保健協力財団が主催国立ハンセン病資料館が協力して、ブラジル、マレーシア、フィリピン、台湾、オーストラリアからの参加者を得て、「ハンセン病の歴史保存ワークショップ」(非公開)を、資料館研修室・映像ホールで開催した。

24日午前、研修室を会場に儀同政一資料館図書室長の進行で開会、山口和子財団常務理事が挨拶とハンセン病の歴史保存の意味について趣旨説明を行い、次いで成田稔館長が歓迎の挨拶を兼ねて日本のハンセン病対策の特質の要点を説明した。続いてハンセン病専門医の立場から湯浅洋氏が国際的なハンセン病の歴史保存の現状を報告し、黒尾和久学芸課長が日本のハンセン病資料館の取り組み(設立目的・経過、収集資料の特徴、果たせる役割、今後の課題等)について講演、当事者運動の成果として立ち上げた資料館建設の経緯について佐川修運営委員が補足した。

午後映像ホールに移動、黒尾課長の進行で、参加各国の歴史遺産

ワークショップでの討論



の保存、博物館作り等の取り組みや課題が発表された。まずブラジルのモーハン(MOHAN・回復者社会復帰運動)の実践をアルツール・クストディオ・モレイラ・デ・ソウサ、クリスチャーノ・トレス両氏が報告、次いでIDEA台湾の頼澤君氏が台湾での歴史保存の現状と課題を発表、休憩をはさんでマレーシアの実践を、同国工科大学上級講師のリム・ヨン・ロン博士がスングエイブロー療養所の歴史遺産の保全と表象、政府機関の立場からロキア・ビンチ・アブドル・サマット氏が遺産保全の方針と実情を報告した。続いてフィリピンの事例としてクリオン療養所総合病院のアルトゥーロ・C・クナナン・Jr.院長が、同療養所のハンセン病歴史保存と活用の現状を、次いで国家歴史委員会のマリア・セレナ・I・デオクノ博士が同国の歴史遺産保全の現状とシステムを報告した。

2日目は、終日映像ホールを会場に、午前は、フィリピン国立公文書館責任者のビクター・V・マナロ氏が同公文書館におけるハンセン病史関連史料保存の取り組みを報告、続いて平澤保治運営委員が、日本の資料館の特長と先駆性を自身の経験を踏まえて強調、本研究会への期待、国際協力の大切さについてメッセージを述べ、最後にオーストラリアのクイーンズランド大学講師のジョー・ロバートソン博士が世界のハンセン病の歴史保存の流れについて総括的な発表を行った。

午後は、それまでの講演や発表を踏まえて、各国や相互の課題を整理する自由討論を行った。活発な意見交換の結果、ワークショップの成果として参加者全員による確認事項(Recommendations)の案文(英文)をまとめ、十八公宏衣財団常務理事が閉会の挨拶をし、2日間の全日程を終了した。

確認事項の要点は、まず会議参加者全員が、歴史に学び、未来に教訓を引き継ぐ目的でハンセン病の歴史遺産保存の重要性を合意、その緊急性を認識、そのための取り組みを今後も継続する。同時にハンセン病回復者の被害、名誉回

復のための闘いを社会に訴える必要性も確認、そのための協議を、回復者とその家族、専門家(学芸員、歴史家等)との間で重ねる。さらに歴史遺産の保存計画促進のために、各運動団体や非政府組織および研究者が、関係省庁・機関と活発な討議と協力の推進を提唱、団体相互のネットワーク形成を援助奨励、博物館や研究機関所蔵の史料の相互利用とハンセン病史研究への貢献方法の探求、各組織の持つ計画や資源、経験の共有化、ハンセン病史表象をめぐる独自また相互補完的な役割を議論、国境を越えた国際的ネットワーク形成の可能性について探求する、等である。

東京集会の内容は、直ちに27日(土)に、岡山アークホテルでの、

『ハンセン病のこれからを考える国際シンポジウム』(長島愛生園歴史館・笹川記念保健協力財団主催・聴衆200名)で公開された。

長島愛生園歴史館田村朋久学芸員の司会で、藤田邦雄愛生園園長が主催者代表挨拶を行い、次いでハンセンボランティア「ゆいの会」会長近藤剛介護士が「日本におけるハンセン病問題の歴史保存とその活用」という基調講演を行った。

その後、国立ハンセン病資料館黒尾学芸課長のコーディネートでのパネルディスカッションとなり、マレーシア、フィリピン、ブラジルの代表が事例を報告、続いてロバートソン博士が、東京ワークショップでの確認事項を紹介した。全体で2時間という制約があり、討論は十分に行えなかったが、博物館作り、史料保存、歴史遺産登録などをキーワードにハンセン病問題を中心とした国際交流のきっかけを作るシンポジウムになり、会場の反応も上々であった。

東京・岡山の研究集会を終え、作成された確認事項が遠くから「正文」となり、その理念をより多くの人々が共有できるようになればよい。その実現のためにハンセン病資料館はいかなる貢献ができるかと考えながら、関係者と手を携えて、今後も国際交流の輪を広げる地道な努力を継続したい。



国際シンポジウムの会場風景

二〇一二年度秋季企画展終了 「癩院記録」に心集まる

10月6日から約3ヶ月に渡り開催してきた今年度の秋季企画展「癩院記録——北條民雄が書いた絶対隔離下の療養所——」は、年内の開館最終日だった12月27日に終了した。多くの方にご覧いただき、改めて北條民雄の名前の力を実感した。

11月10日には付帯事業として、講演会を開催した。企画展が北條民雄の人となりや作品世界全体をとりあげた訳ではなかったため

「北條民雄展」を期待した来館者には期待外れだったかもしれない。その点、講演会で講師をお願いした清原工氏は『吹雪と細雨 北條民雄・いのちの旅』のご著書をお

持ちの方で、北條が書き残した作品の一節を引きながら、半生について詳しくお話しくださった。北條作品のファンの方々にも満足してもらえたのではないと思う。

今回の企画展では、展示論的な観点からすれば、随筆「癩院記録」「続癩院記録」を展示化する試みを通して、文章と展示それぞれが持つ表現の長所と短所の違いを、改めて痛感させられた。

最大の難題は感情の部分はどう展示で表現するかで、結局2カ所だけ原文をそのまま引用することにしたのだが、これという方法を見つけることはできなかった。今後の課題だと思う。



秋季企画展会場

情景の視覚化については、どこまで見せてよいのかの判断が難しかった。これは歴史的事実を示すばかりでなく、北條が随筆に込めたメッセージを伝えるための前提だった。例えば生々しい重病室の様子を写した写真は、「どんなに酷い状態になっても人が生きることは尊い」という北條のメッセージが、どのような状況の中で、どれほどの真剣さをもって発せられたのか知ってもらうために不可欠だったのだが、もしも差別を助長する方向に悪用されれば、大変な過ちを犯したことになる。

展示の成否は、資料の選択や展

示表現の技術における作り手の適切な判断と、展示を見た来館者がどう受け取り何をするか、大きく左右される。ある意味で作り手と来館者との勝負、あるいは共同作業なのだが、今回の企画展では、その緊張感は最後まで薄らぎなかった。

～実態を告発する市民集会～ 全国から多くの市民が参加

11月5日ハンセン病療養所の将来構想をすすめる会の主催で「いまハンセン病療養所のいのちと向き合う！～実態を告発する市民集会～」が科学技術館地下1階サイエンスホールで開催された。480人も多くの人が集まった。

国家公務員削減計画によって職員が減らされ、介護職員の人手不足によるサービス低下の深刻化を防ぐため、全療協は昨年7月に、厚労省に対してハンストを含む実力行使を決議した。この集会は療養所の実情を社会に訴え、多くの市民の理解を得、運動への参加を呼びかけるために開催された。

初めに神美知宏全療協会長が「ハンセン病療養所における介護

神全療協会長の基調報告



の実態」と題して基調報告が行われた。最初に療養所入所者数が2096名、平均年齢82・1歳、寝たきりの入所者が8・8%、食事介助の必要な入所者が26%、認知症と思われる入所者が22・2%、おむつをつけている入所者が26%と入所者の現況を述べた。そして認知症と思われる入所者にどうなるようになった食事をスプーンですくって職員が与えている場面や年齢を尋ねても答えられない入所者がいるという、神会長が知る療養所の現状を紹介した。職員も入所者が元気になるよう努力してくれているが、行政改革推進法と閣議決定によって職員定員が削減され、これまで行われた介護さえも維持できなくなっている。形骸化しているハンセン病問題基本法を活かすためにも、再び市民による運動

への支援を呼びかけた。

続いて江田五月議員・川内博史議員の挨拶と中曽根弘文議員のメッセージの紹介をはさみ、様々な立場から介護の必要性が訴えられた。青木美憲邑久光明園副園長は入所者にはハンセン病によって複数の障害があり、一般の障害者に比べ介護の必要性が高いことを述べ、御雄三全原協会長は患者作業で後遺症が生じたことや不自由者棟の実情を告発し、松丘保養園木村健一介護員は一日の仕事を紹介しながら、入所者個々に合わせたサービスを行いたい職員数が足りず難しい現実を報告した。ハンストを決意している星塚敬愛園の田中民市さん、玉城シゲさん、上野正子さんらはその心境を語り、徳田靖之弁護士は「入所者の人がハンストを行わないためにも入所者を支援する市民の輪が必要だ」と述べた。最後に酒井義一首都圏市民の会事務局長が国への要求事項を骨子とした決議文を提案し、採択された。

ハンセン病療養所の介護は、入所者一人一人の人生に寄り添うことができて初めて成り立つ。入所者と介護職員がふれあえる時間や後遺症に合わせたきめこまかなサービスが出来る環境の実現は、入所者が「生きていてよかった」と思える心のやすらぎとつながるはずである。残された時間が少なくなってきた今、市民による運動の支援と、国の早急な対応が急務である。

説明を聞く三井大臣



三井前厚生労働大臣が来館 展示作品や企画展も見学

野田内閣改造に伴い就任した三井雄厚生労働大臣(当時)が、10月24日当館を視察に訪れた。多磨全生園で入所者自治会・全療協との懇談を終え、園内の視察と納骨堂への参拝の後に、予定よりも早く来館した。当館が国立になつて以降、就任された厚生労働大臣や副大臣が視察に訪れることは恒例となっている。

成田総館長をはじめ、資料館および日本科学技術振興財団の幹部の

出迎えの後、平沢保治運営委員の案内でまず常設展示を見学した。

特に入所者の作品を展示した展示室3に時間を割いた。その後、企画展示室に移つて今年度の秋季企画展「癩院記録」も見学した。

この日ちょうど映像ホールでは、笹川記念保健協力財団の主催で、ブラジル、オーストラリア、フィリピン、マレーシア、台湾から回復者や研究者が集まり、当館から黒尾和久学芸課長が参加して、「ハンセン病の歴史遺産保存ワークショップ」が開催されていた。三井大臣は展示の見学後、その会場にも立ち寄った。

最後に会議室で記者会見に臨んだ。記者との質疑の中では、特に資料館についての言及はなかったが、多磨全生園入所者自治会や全療協から出た要望について、入所者の方々の思いを汲みながら検討していくと話した。

●高校時代に、ハンセン病について学んだことがあります。その時は、写真でしか見なかったのが、具体的にどんな状況であつたのかを理解することは出来ませんでした。今回初めて来館しましたが、まるで刑務所のようなイメージを受けました。罪もない人々が強制的に隔離されることほど悲しいことはないです。こういうことが二度と起きないように平和な未来を築きあげていきたいと思いました。

(学生・女・20歳)

●二度目の来館ですが、展示を見ると胸がしめつけられます。近隣に住んでいますが、資料館の存在

コンウォール・リー展 数々の功績を紹介

去る11月7日から11日まで、当館ギャラリーにおいてコンウォール・リー展が開催された。主催は、聖バルナバミッシェンとリー女史記念事業推進委員会、当館での展覧会は、今回で3回目となる。

今年は、リーが活動していた群馬県草津町にも記念館が建設され、一九一六年に草津でバルナバ医院进行を始め、ホームや教会、小学校、保育所を開設して、患者やその家族を救済したリーの功績を広く伝える場が増えた。

当館での展覧会においても、ハンセン病患者の救済に尽力したリーの功績を、パネルや愛用の品々を通して顕彰しており、例年同様、大勢の来場者で賑わった。

コンウォール・リー展会場



●貴館へ来ると、毎回涙する。日本人として知っておかねばならない歴史。(中略)企画展を拝見して「やはり涙々であつた。人というものは強い生き物だ!と感じた。そして何か「強く生きろ!」という(気)をもらった気がする。もつと沢山の人々に見てもらいたいと思つている。(無職・男・40歳)

(看護師・女・50歳)

来館者の声

●昔は、そのように苦しいことがあり、この資料館に来なければ分からないことがたくさんありました。今日もらったパンフレットを使い、調べ学習を進めたいと思います。

(中学生・男・14歳)

●もう一度、プライベートでじっくりと時間をかけて見学したいと思ひます。知らない事が多すぎると感じました。

(バス運転士・男・47歳)

ギャラリーで人権パネル展

去る11月3日(土)、当館1階ギャラリーにおいて、恒例の人権パネル展が全生園祭りに合わせて開催された(主催・東京法務局、東京都人権擁護委員連合会、後援・東村山市、東村山市教育委員会、NPO法人東村山活き生きまちづくり、(財)人権擁護協力会)。

会場には全生園の四季を彩る花々の写真、世界人権宣言、人権ボスターなど人権擁護に関する啓発パネル、冊子等が展示された。また研修室では子ども向けのアニメーション上映、啓発キャラクターのぬり絵コーナーなどが設けられ、親子連れや子ども同士の来館者が訪れていた。

人権パネル展

